

---

# 倉庫番と仔犬

乙狩臼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

倉庫番と仔犬

### 【NZコード】

N7228M

### 【作者名】

乙狩田

### 【あらすじ】

私は非合法の貸し倉庫の運営で生計を立てている。

大きいものは戦車から小さいものはウイルスまで、どんなやばい物でも預かり顧客が望む期間保管するのが私の仕事だ。

私は非合法の貸し倉庫の運営で生計を立てている。

大きいものは戦車から小さいものはウイルスまで、どんなやばい物でも預かり顧客が望む期間保管するのが私の仕事だ。

「やつこいつわけで、ぼくをあすかつてほじこのでふ」

「何がやつこいつわけなのかやつぱり分からんが……」

今、私の前にいるのは決して舌足らずな男の子とこいつわけではない。

田の前のソファーにいるのは芝犬の子犬だ。ソファーの上に登つて行儀良くお座りしている。

背中に小さこリュックを背負い、ソファーの下にモードラッグフードを満載したヒモつきのラジオフライヤーカートが置いてある。ヒモを咥えてこじまで引つ張つてきたらしく。

「でふから、いじゅじんまたちがきゅうになくなつてしまつたでふ

「いなくなつた？」

「けやおきたら、おつかにはだれもいなかつたのでふ……」

ふむ。恐らく夜逃げでもしたのか。あるいは引越し先の家がペット禁止の物件で、飼い犬を捨てていったのか。恐らくそんなところだわ。

まあ無責任な飼い主といつのはなぜ珍しいわけではない。

「なので、『じしゅじんせあたちがむかえにくるまで、ぼくをあずかつてほしこのでふ』

「……まあウチではどんなものでも預かるのが自慢だが、支払いは必ずするんだ?」

「あんまつ、おかねといつものはもつてないんでふけど……」

セツニツトナ犬は器用に背中のリュックを下ろし、鼻先で中をじしゃと探る。

取り出したのは、子供用と思しき、アニメのキャラクターがプリントされた小さな財布だった。

「ゆうべ、けんすけくんがぼくにくれたんでふ。きのうは、なんでなのかわからなかつたんでふが、きつとこのためだつたんでふね……」

…

中を確認すると、千円札が一枚に小銭少々。

ケンスケとは、この子犬が飼われていた家の子供のことだわ。

子犬を置いていくことを親から聞かされ、子犬のためにとなけなしの小遣いを渡したのだろうか。

犬に金の使い方が分かるとも思えないが……。猫に小判ならぬ犬に  
夏田漱石といつといろか。

「おひちこせ、『じせんもたくさんおいてあつたでふ。わひとむかえ  
にこくまで、このおかねど』じせんをつかつて、おとなしくまつてい  
る、とこいりとだとおもつんでふ」

どひから自分が捨てられたといふことが分かつていなこらしき。そ  
れとも気づかないフリをしてこるのか。

「でも、おひちでほくだけでまつてると、いろいろとあぶないでふ。  
『ほけんじょ』って、『おばけにみつかつたりしたら、『じしゅじん  
さまのいない、こねやね』は、みんなどにかにつれていかれてたべ  
られちやつてこいつ……。でぶから、『じでほくをあすかつてほ  
しい』のでふ」

「ふむ……話はわかつた。だがしかし、たつたこれだけの金じや一  
泊分の料金にもならんぞ?」

「たりないふんは、『じしゅじさんまがむかえにれたとれにせらつて  
くれまふー』

「ふ、む……」

そんな口は憚らしく永久に来ないのだが。

「おねがいしまふー、こいつしかんでもいいんでふー」

そう言つて子犬はソファーの上で、わくわく皿をつむりながら十下

座をした。傍田には伏せの体勢にしか見えない。

少し迷つたが、ここしばらくは他に生き物などの手のかかる預かり物もないし、何より人語を話す犬も最近は珍しくなったので興味本位で引き受けたことにした。勿論採算は度外視だ。

「あ、ありがと」「やれこまふつ！」

そう言つて子犬は土下座（伏せ）の姿勢のままでさらにこれでもかと頭を下げた。おかげで鼻先がソファーに埋まつてゐる。

この仔犬（名前は三郎太といつらじい）は思つていたより賢い犬のようだ。

私が客と話してゐると、どうやって入れたのかは分からぬがお茶をヒモつきカートに載せて持つてきて、

「 わむや だいじやこまふ」

そう言つて密に出したつす。

またある時は、人間用のトイレから用を済ませて出てきた三郎太に行き会つた。

「あ、といれつとペえぱあがきていたので、こうかんしておきまふた」

賢いにも程がある。

普段、三郎太は自宅から持つてきたカリカリのドッグフードを食べていたが、ふと思い立つて冷めたご飯に味噌汁をかけたものを『え

てみた。

「……！」

おいしいでふね！これおいしいでふね！  
なんていうかあついでふか？！」

「ねこまんまとこうものだ」

「こんなおいしいものたべたことないでふ！  
こんなものがよのなかにあつたんでふね……」

「気が向いたらまた作つてやつてもいい……」

そこで気がついた。

明日で約束の一週間だということ！

三郎太は私の考へることに気が付いたらしく、先ほゞとは打つて  
変わつて暗い表情でねこまんまをモソモソと食べている。

「なあ三郎太……もしお前がよかつたら、なんだが……」

「それいじょうはないでくだたい」

「……」

「もしぼくがノラだつたら、 よりこんであなたを『しゅじんをま  
とよんだでふ……。」

でもぼくには、 もう『しゅじんさまがこまふ……』

「……捨てられたのにか？」

自分がこんなことをいつなんて、 血分でも意外だつた。

三郎太自身が、 自分が捨てられたといつ事實に薄々気がついてゐ  
ることを私は知つていたのに。

それほどまでに、 私はこの仔犬を失いたくなかったのか。 執着して  
いたのか。 孤独を恐れていたのか。

「……もし」

三郎太の一言に、 思考の渦から引き上げられた。

「もし！」しゅじんをまたちが、 ぼくをすてたのだとしても……、 や  
つぱりぼくにとつての『しゅじんをまは、 けんすけくと、 おどり  
さんと、 おかあさんだけでふ……そのきもかにいつわはつきたくない  
でふ！』

「……あーわかつたわかつた。 ただの冗談だ。 そう真に受けけるな」

「……『めんなさい』でふ……」

「だから謝るな……なんだか女に振られた男みたいじゃないか」

「ほくオスでふよ?」

「ルハニヒリと書ひてるんじやなー」

「……もし」

「ん?」

「もしあしたまでに、『じゅじんさまがむかえにきてくれなかつたら……、ほくは『ほけんじょ』にうられて、たべられちゃうんでしょつか……』

「……ああなあ、とりあえず明日になつて迎えが来なかつたら、そつあるかもしけんな」

「……」

次の朝。

事務所の前の道路で、私と三郎太は向き合つていた。

三郎太は一週間前にここに来たときと同じようにリュックを背負い、カートを引いている。

カートのヒモは口で引いていくのは大変だらうから、私が改造してリュックの左右に繋げられるようにしておいた。

リコックとカートの中には、昨日私が「いつそつ買つておいたドッグフードが満載してある。

「あの、これはこつたにどうこう」とやふか……？」

「生憎と私も『ほけんじょ』といつのが大嫌いでな。

お前を奴に引き渡すくらこなら追に出すまつがまだマシだ」

「あ……あいがとうござむだふー。」

「礼を言ひのはまだ早い」

「え？」

「レーリーちも商売だ。

この一週間のお前の保管代と、Hサ代と、そのリコックとカートに満載してあるペットフード代、きつちり耳揃えて払つてもらひ。

請求書はお前のリコックの中の、ケンスケくんのサイフに入れておいた

「え、えと……あの……」

「たつた一千円ぽつちじや消費税にもならないからな。料金はお前の「主人様とやらからまとめて支払つてもらつわ。

だから必ず「主人様を見つけて、絶対にこじまで、それこそ首に縄括りつけてでも連れて来い」

「……はいでふつー！」

そう言ひて三郎太は頭を深く下げ、朝焼けに照らされる歩道を胸を張つて歩き出した。途中で何度も振り返り、その度に頭を下げながら。

その夜、珍しく深酒をした私はソファーの上でうたた寝をしながら、三郎太の夢を見た。

三郎太は重いカートを引きながら、飼い主を探し求めて旅をしていった。その表情は誇りと喜びと希望に満ちている。

時には車に轢かれそうになり、時には行く先々の人々や犬達の親切に助けられたり、くじけそうになりながらも、ゆっくりとではあるが歩みを進めていた。

月明かりが照らす海岸を。

朝もやに煙る峠道を。

下校中の子供達の笑い声が響く田んぼ道を。

雪の降り積もる町の中を。

誇らしげな顔でただ前だけを見て、4本の足で歩いていた。

あれから半年が経つ。

三郎太が飼い主と出会えたという便りはまだない。

きっと今でも、飼い主を探して日本中を旅しているのだろう。

私はそう信じている。

(後書き)

7 / 26 推敲。

『ねこまんま』でググつて、犬猫にねこまんまは塩分过多で健康上好ましくないという事実を知る。

話の展開上、作中で保健所を「大嫌い」と書いてますが、保健所及び保健所職員の方々を貶める意図は一切ありません。気分を害した方には謹んでお詫び申し上げます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7228m/>

---

倉庫番と仔犬

2010年10月16日10時04分発行